

災害復旧事業によせて

平成16年災 宮川水系災害復旧助成事業について



岐阜県飛騨市長

井上久則

(神通川水系宮川河川整備促進期成同盟会会長)

1. 飛騨市の概要

本市は、岐阜県の最北端に位置し、北は富山県、南は高山市、西は白川村に接し、岐阜市から約150km、高山市の北約15kmの位置にあり、面積は792.31km²でその約92%を森林が占めており、周囲を3,000mを越える北アルプスや飛騨山脈などの山々に囲まれた地域です。

平成16年2月1日に、旧古川町、旧河合村、旧宮川村、旧神岡町の2町2村が合併し、飛騨市が誕生しました。(図-1)

飛騨市は水との関わりが深く、市章(図-2)にも「水と木の文化薫る四地域が響き合い、市民や他の地域、そして世界へ発信する様子(活力)」が表現されており、古川町の朝霧、河合町の雪、

宮川町の豊かな水、そして神岡町の最新技術(ニュートリノが発見されたスーパーカミオカンデ等)を支える水など、四地域をつなげる「水」に着目し、波紋や年輪をモチーフとして立体的で現代的なシンボルとしております。



H I D A C I T Y

飛 騨 市

図-2 飛騨市の市章

また、白壁土蔵に沿って流れる古川町の瀬戸川には、春から秋にかけて色とりどりの鯉が泳ぎ、冬には三寺参りの願いを込めた灯籠が流れるなど、飛騨市の観光名所となっております。(写真-1)

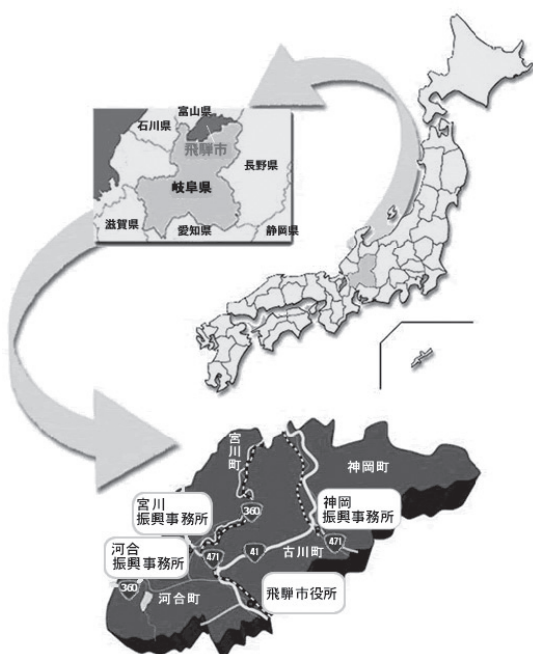


図-1 飛騨市の位置



写真-1 三寺参りの瀬戸川の風景(古川町)

2. 台風23号災害

飛騨市が合併したばかりの平成16年、新たな市政を行政と住民が手探りで模索する中、台風23号は、西日本を縦走し各地に甚大な被害をもたらし、岐阜県内、特に飛騨圏域では、宮川流域において10月19日の朝より雨が降り始め、20日の夕方から深夜にかけてその勢いがピークとなりました。高山測候所では20日20時に時間雨量56.6ミリ、24時間雨量256.6ミリと観測史上最大値（概ね50年に一度発生する規模）を記録しました。（図-3）

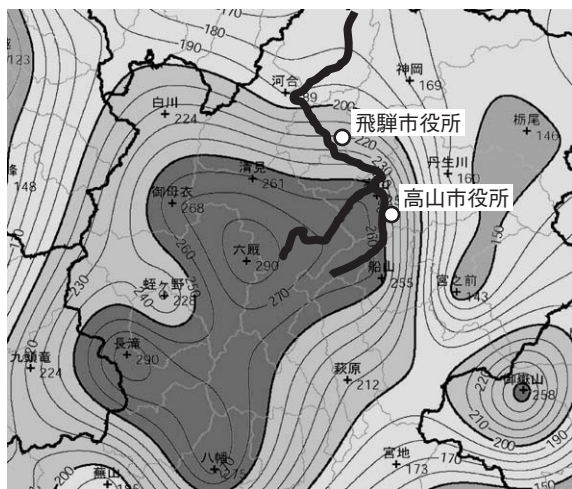


図-3 平成16年10月20日の等雨量線図

この豪雨により、それぞれの支川から増水した濁流が宮川に流れ込み、各地で溢水を繰り返しながら流れ下る濁流の勢いとそのスピードは今までかつて経験したことがなく、不安におののくことしかできない状況でした。

この洪水時の水位は、宮川の古川大橋観測局において、20日16時以降に急激に水位が上昇し、18時には警戒水位に達し、22時には計画高水位を0.8m上回る4.78mに達しました。（表-1）

翌日、日が上るにつれ、被災の状況も見て取れるようになり、その惨状に愕然としたのを覚えています。河川から農地や道路に溢れ出た大量の土砂、押し流されてきた大木やその他の残骸、形を変えてしまった河の流れ。その被害の範囲は、宮川水系上流部の高山市清見町から国府町、またその下流に位置する飛騨市古川町、河合町、宮川町の各地に及び、家屋の流失、床上・床下浸水、河川堤防や護岸・生活道路の決壊崩落、地域の生活を支える JR 高山本線の鉄道橋、線路流失など飛騨地域管内で公共土木施設700箇所余りの甚大な被害をもたらし、被害総額147億円余に上りました。（写真-2）



写真-2 JR 鉄道橋の流失（宮川町地内）

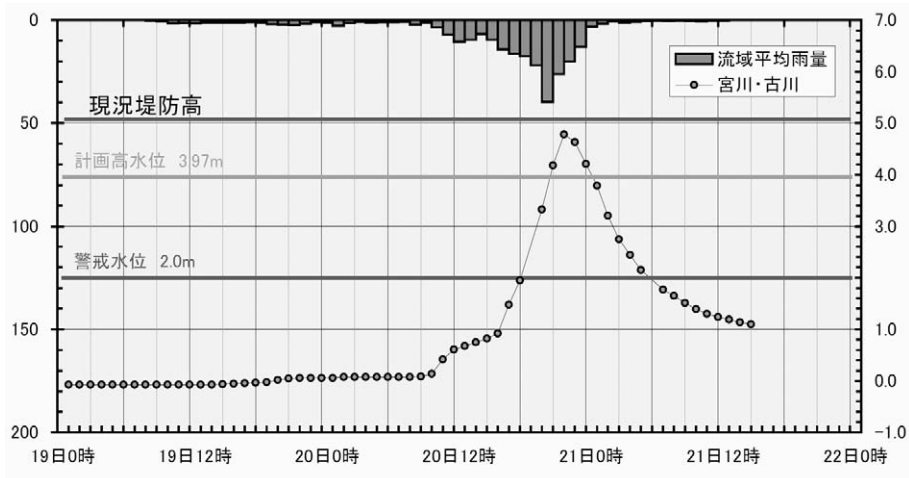


表-1 宮川（古川地区）の水位経過グラフ

呆然としつつも日常生活を取り戻すために、住民が支えあって復旧に取り組み始めました。地域の住民はもとより、被災直後から、国土交通省、岐阜県を始めとする関係機関皆様の迅速な対応により、即時の情報収集と災害対策に着手していただき、緊急輸送路の確保、通信・電力の復旧、浸



写真-3 流されてきた土砂とゴミ (河合町地内)

水住宅に対する防疫対策、ボランティア職員の派遣等、想定されたあらゆる面で市民の日常生活確保のために支援活動を行っていただきました。非常にありがたく、また心強く感じたのを覚えています。(写真-3~6)



写真-6 ボランティアによる復旧状況(ゴミの処分)



写真-4 住宅の復旧状況 (古川町地内)

3. 災害復旧助成事業について

今回の洪水では、宮川に加え、瓜巢川、川上川、牧谷川及び大楯谷川といった支川も大きな被害を受けました。これらの河川では本川、支川の一体的な治水対策として、流域全体での治水安全度を向上させる「水系型助成事業」により、治水安全度の確保を図る計画が立案され、平成16年度に「宮川水系災害復旧助成事業」として国の事業採択を受け、今回の災害要因解消と今後の対策のため、宮川圏域河川整備計画に基づき宮川水系の5河川約44kmを一体的に整備することとし、岐阜県が5カ年で151億円余りを投入する事業に着手されました。

本川、支川の一体的な治水対策として、引堤や護岸の施工に際しては現況の河床をそのまま残し、また全面的な河床掘削が必要な箇所では瀬や淵をつくり、被災前と同じ自然豊かな環境となるよう配慮しながら、河床掘削、河道拡幅、護岸整備工事、天神堰及び大久古堰(写真-7)などの大規模施設の改築工事などが実施されました。

実際の工事にあたっては、地元住民や有識者による検討組織を立ち上げ、どのように自然豊かな環境を復元するかを検討し、創出する瀬や淵の形状や樹木の復元などについても、被災前の川の状



写真-5 復旧の際に集められたゴミ

